

目次

獣のための倫理学	……3
眠る羊	……65
狼たちの午睡	……115
上演記録	……129

『けもの獣りんりがくのための倫理学』

『獣のための倫理学』

【登場人物】

市川玲子（いちかわ・れいこ）……精神分析医。犯罪研究会「えていく」主宰。

新浜こより（にいハマ・こより）……駆け出しのフリーライター。

三雲義範（みくも・よしのり）……東京地検特捜部・主任検事。

米村彰二（よねむら・しょうじ）……弁護士。「橘の会」代表。

後藤志乃（ごとう・しの）……助産師。

向井圭一（むかい・けいいち）……中学校の社会科教師。

七瀬春昌（ななせ・はるまさ）……東京都緑化技術センター研究員。

矢神裕太（やがみ・ゆうた）……大学生。玲子の教え子。

楠木裕人（くすのき・ゆとり）……都庁食糧保全部職員。

【時】

二〇二五年、三月。

【場所】

とある会議室。

二〇一五年、三月のある日、とある会議スペース。

数脚の椅子と小卓があるだけ。隅には衣装などを入れた荷物。

市川玲子が小卓で蓮の造花を作っている。

新浜こよりがくる。

新浜「……市川さん」

玲子「（顔を上げる）あ、どうも。どうぞどうぞ」

新浜「少し、早かったですか」

玲子「ああ、いえ、大丈夫です、あの、どうぞ」

と玲子、中へ入るよう促す。

新浜「（造花を見て）それ……」

玲子「小道具です」

新浜「手作りなんですか？」

玲子「普段はあり物なんですけどね。あ、そうだ、まずこれ」

と玲子、新浜に名札とペンを差し出す。

玲子「お名前を書いて、どこかわかりやすい場所に」

と、勢いよく矢神裕太が入ってくる。

矢神「遅れました、すみません！」

玲子「ああ、今日はどうもありが……」

矢神「（ぐいぐいくる）玲子先生、何しましょう！なんでも言ってください！」

玲子「（新浜に）私のゼミの学生で……」

矢神「矢神です！」

玲子「（矢神に新浜を紹介しようとして）こちらは……」

矢神「待ってください、当てます！ 後藤さん？」

玲子「フリーライターの……」

矢神「あ、そっちな！」

新浜「新浜です。今日はお世話になりました……」

矢神「どもんちゃーす！」

玲子「（受付用の名簿や筆記具を差し出し）来て早々何だけど、受付、頼んで……」

矢神「はい、喜んで！」

玲子「名簿でお名前を確認して、この名札を……」

矢神「名簿、受付道具を受け取り、すっ飛んで行く。」

玲子「……騒がしくてごめんなさい」

新浜「ああ、いえ」

玲子、造花用の材料と道具の入った箱を指す。

玲子「名札書いたら、これ、お願いできますか」

新浜「私ですか」

玲子「今日はね、一人一つ、作ってもらおうと思ってるんです」

新浜「でも私、工作はあんまり……」

玲子「蓮の花を、作ってください」

新浜、何かを察したように玲子を見る。

新浜「そういうことなら。あ、でも、本当に下手ですよ」

名札をつけて米村彰二と三雲義範がくる。

米村「先輩」

玲子「米村くん！ 今日ありがとうございます」

米村「（新浜を目で示し）彼女？」

玲子「ああ、ううん、違うの。まだ来てなくて……（と三雲に視線を移す）」

米村「三雲くん。友人です」

玲子「ああ、はい、（三雲に）伺っております」

三雲「今日は勉強をさせていただきます」

胸に名札をつけ、紙を手にした後藤志乃がくる。

玲子「（後藤に気づき）こんにちは」

後藤「後藤と申します。ワークシoppに」

玲子「市川です、どうぞ」

後藤、入ってくる。

玲子「米村くん、彼女が」

米村「あ、そうですか」

後藤「今日はよろしくお願いします」

玲子「こちらこそ。まだ少し時間があるので、お掛けになっってお待ちください」

後藤「はい。あの、花を作るように、受付で（と作り方のプリントを示す）」

玲子「ええ、はい。道具がこちらに……」

名札をつけて楠木裕人、続いて七瀬春昌がくる。

楠木「先生、どうも」

玲子「楠木さん。今日もよろしく。（七瀬の名札を見て）えっと、七瀬さん？」

七瀬「あ、はい。応募がぎりぎりです、本当にすみません」

玲子「ああ、いえ、全然」

米村、楠木に声を掛ける。

米村「すっかり常連ですね」

楠木「ええ、まあ。(玲子に)今日は最初に、花を作るとか……」

玲子「そうなんです。米村くん、三雲さん、ええと、

七瀬さんも、いいですか？」

三雲「いつも、こういうことを？」

玲子「そうではないんですけどね」

米村「(花を作り始める)事件のあった村、農家がみんな蓮の花、作ってたろう。我々も、疑似的にその体験をしておいた方がいい。(玲子に)そういうことですよね？」

七瀬「(玲子の作った蓮を見て)あの、これは何でしょうか？」

玲子「はい？」

七瀬「あ、いえ、すみません、蓮にも色々あるなと思つて。品種は……」

玲子「あ、なんだろう。写真が載ってたんです、大摘村のホームページに。それを見て」

七瀬「ああ、なるほど、わかりました。だったらあれかな……」

と七瀬、造花を作り始める。

新浜、ハスを完成させる。

玲子「(新浜に)上手にできましたね」

新浜「(不満げ)そうですか？」

玲子「雰囲気出てますよ」

新浜「うーん、納得いきません」

後藤「(蓮を作り終えて玲子に)何かお手伝いできることあれば」

玲子「大丈夫ですよ。座っていてください」

後藤「いえ、あの、ちょっと落ち着かなくて……緊張、しているというか」

玲子「ああ、では衣装と小道具、出してもらえますか」

玲子と後藤、部屋の隅に置いてあった荷物を解き、衣装を並べ始める。

三雲「(米村に)衣装まであるの？」

米村「いや、今回初めて。ね、玲子先輩、普段はもつと簡単ですよ」

玲子「(荷物を解きながら)今日はね、特別なんです」

三雲「特別？（米村に）何が？」

と矢神が駆け込んでくる。

矢神「先生、電話、電話！ 参加者、道に迷う、俺バ二

くる！」

玲子「落ち着きなさい。道案内は？」

矢神「いやもう複雑すぎて」

玲子「駅から道なりに歩くだけでしょ。もう。（参加者

たちに）すみません、ちょっと外します。後藤さ

ん、あと（の作業）をお願いしても？」

後藤「はい」

玲子、出て行く。追う矢神。

新浜、作業の手を止め、米村に声をかける。

新浜「あの、市川先生とお知り合いなんですか？」

米村「（作業をしながら）大学の先輩後輩です」

新浜「特別って何ですか？」

米村「（手を止める）はい？」

新浜「さっき、今日は特別って」

米村「言ったかな」

楠木「あれのことじゃないですか。先生、一度失敗し

たっていう」

新浜「失敗？」

楠木「三年前、『大摘村事件』で」

新浜「あ、ロールプレイ」

楠木「それが、途中で行き詰ったって」

新浜「ロールプレイが？」

楠木「事件を再現していくにつれ、どんどん矛盾が出

てきて。最終的に参加者全員、動けない喋れない

状態になったらしいですよ」

新浜「そんなことつてあるんですか？」

楠木「進行役が慣れてないとあるらしいんです。でも」

新浜「そっか、市川先生はロールプレイの第一人者」

楠木「普通に考えたら失敗なんてありえないですよね」

新浜「それなのに『大摘村事件』は先生の手におえな

かった」

楠木「今回はリベンジのつもりなんじゃないかな」

後藤、荷物の中から何かを見つけて悲鳴を上げ

る。

七瀬「大丈夫ですか？」

後藤「ごめんなさい、急に出てきたから、驚いて」

と鬼の面を見せる。

新浜「お面？」

楠木「それ、あれでしょう。事件の時、犯人がかぶってた……」

玲子と矢神が戻ってくる。

玲子「(後藤に) ありがとうございました。皆さん、すみません、お待たせして」

米村「一応、時間になりましたが」

楠木「けっこうかかる感じですか？」

矢神「俺の道案内でだいぶ向こうまでいつちやいました！」

米村「どうします？」

玲子「時間もあまりないしなあ……とりあえず自己紹介だけでも始めましょうか」

玲子、全員を見渡す位置に立つと一礼する。

玲子「この度は犯罪研究会『えていく』のワークショップにご参加いただき、ありがとうございます。『えていく』主宰の市川と申します。よろしくお願い致します」

玲子、続けようとするが矢神がぐいぐい割り込

む。

矢神「矢神裕太です！ 玲子先生の教え子です！ 今日

は先生の右腕としてワークショップの運営を徹底的かつ完璧にサポートします！ 玲子先生との出会いをお話しますと、実はなんと大学で出会ったのではなく、さかのぼること四年前、まだ俺が高校生の頃、原発事故で故郷福島を……」

玲子「それは追いつ追いつ話そうね。新浜さんからこういう順番に、お願いします」

と新浜、米村、三雲、後藤、七瀬、楠木の順に指す。

新浜「新浜と申します。フリーでライターをやっています。今日のテーマである大摘村事件について今、色々調べています。よろしくお願いします」

米村が立つ。

米村「米村です。被害者家族と加害者家族を支援する『橋の会』を運営しています。今日は双方の立場を知る者として、市川先生から参加を依頼されました。なるべく公平な視点から意見などを申し上げます」

うと思います。ええ、それから彼ですが」

と三雲を示す。立つ三雲。

三雲「三雲です」

と座ろうとする三雲を、米村が軽くたたく。

三雲「米村くんの紹介で参りました。東京地検で検事をしていきます。今日は多くの功績を挙げた市川先生の方法を体験できるということで、楽しみにしています」

玲子「よろしく願います。それじゃ、次……（と後藤を促す）」

後藤「後藤志乃です。都内で助産師をしています。まだ緊張しているので、徐々に慣れて行こうと思います（と、七瀬に手で促す）」

七瀬「七瀬と申します。東京都緑化技術研究センターで蓮の花について研究しています。大崎村の事件について知ったのも、蓮の花がきっかけでした。ロールプレイと言いますか、演劇ですとか、お芝居は初めてなので、自分も緊張しています」

玲子「では最後、楠木さん」

楠木「はい、ええ、楠木裕人と申します。このワーク

ショップには今日で三、いや四回目の参加です。都庁で働いています。よろしく願います」

玲子「今日はこのほかにもう一名、ご参加いただきます。次に『えていく』の活動について簡単に説明をさせていただきます。当研究会の目的は……」

玲子、出入り口を見る。向井圭一が立っている。

向井「あの、こちらは『えていく』の……」

玲子「あ、はい、ワークショップの会場です」

向井「遅くなりました、向井と申します。あの、ワークショップは、もう？」

玲子「これから始まる場所ですよ。大丈夫、どうぞ」
向井「失礼します」

向井、入ってくる。

玲子「簡単でいいので、自己紹介を……」

向井「あ、はい。向井と申します。岡山で教師をしています。よろしく願います」

向井、荷物からノートを出す。

玲子「これで全員集まりましたね。えっと『えていく』

の活動目的ですが。当研究会の目的は、実際に起こった犯罪事件を題材に、なぜ犯罪は起こるのか、未然に防ぐためには何をしたらよいのか、考えることにあります。研究にはロールプレイメソッドという手法を用いており、本日のワークシヨップでは皆さんに実際に体験をしていただきます。というわけで、早速ですが始めましょう。輪になってください」

慣れた様子で部屋の中央に進み出る矢神と楠木、米村。

戸惑いながら並ぶ新浜、後藤、七瀬、三雲、向井。向井はノートを手にしている。輪ができる。

玲子「今日のテーマは大摘村事件です。この事件は三十五年前、岡山県真庭郡大摘地区という集落で起こりました。資料はお読みいただきましたか？」

頷く参加者たち。

玲子「その資料を基にまず、事件のあった村を作ります。では最初に村の中心を決めましょう。中心となる場所はどこでしょう？」

矢神「はい！ 公民館です！ 文字通り、村の中心にあります！」

玲子「他に意見のある方は？」

みんな何も言わない。

玲子「では公民館にしましょう。矢神くん」
矢神「はい！」

矢神、部屋の中心に立つ。

玲子「ロールプレイではイメージが重要になります。少しずつ想像力を働かせてみてください。大摘村で特に印象に残った場所、他にどなたかありませんか？」

向井「……あの、はい（と手を挙げる）。僕はその、蓮を育てる池が」

玲子「ハス田、ですか？」

向井「はい」

玲子「ハス田は公民館から見てどの方向にありましたか？」

向井「（ノートをめくり）えっと、北、です。北の、西寄り」

玲子「では向井さん、その場所に立つてください」

向井「あ、でも、この部屋、どっちが北か……」

玲子「今は、向井さんが立った場所が北になります」

向井「ああ、はい、ではここに」

と向井、輪から外れて『村の北側』に立つ。

玲子「今度は南の方に何かほしいですね。後藤さん、南には何がありますか？」

後藤「（思い出し）お屋敷です。大きくてとても立派な。湯田家の人々が住んでいました」

玲子「では後藤さん、そのお屋敷の場所に移動してください」

後藤、輪から離れて『村の南側』に立つ。

玲子「今日は皆さんに事件の関係者を演じていただき。ます。です。ので表現の練習もしていきましょう。

後藤さん、湯田家のイメージを教えてください」

後藤「イメージ？」

玲子「湯田家は三百年以上続く旧家です。戦後も、大摘地区の地区長として村を導いてきました。たとえば矢神くんならどんな印象を持ちました？」

矢神「ええつと……こんな感じですか？」

偉そうにふんぞり返る矢神。

玲子「とても偉そうですね。後藤さんはどうでしょうか？」

後藤「私は、そうですね、ちよつとそうではないというか……（考えて）資料を読んで、なんだか、とても寂しい感じを受けました」

玲子「寂しい？」

後藤「没落というか、傾きかけている感じが」

玲子「ではその様子を体で表現してみましよう」

後藤、一瞬考えたのち、膝を抱えて座る。

玲子「……なるほど。そうですね。他に、何かあるでしょうか？」

米村「（東の方に立ち）村で唯一の診療所です」

玲子「馬場診療所ですね。そこはどんなイメージですか？」

米村「軍医あがりのお医者さんが切り盛りしています。

頑固なお爺さんです（と胡坐）」

玲子「いいですね。どんなイメージをふくらませましょう。楠木さん、どうですか？」

楠木「はい、ええ、そうですね……」

と楠木、全体を見渡し。

楠木「犯人の家がありません」

玲子「では作りましょう」

楠木「思い出しながら」ええと、村の北……ええ、あ、そうか、ハス田の手前だ」

と楠木、向井の側に立つ。

楠木「犯人は普段から暴力的で、村人から怖れられていました。みんななるべく関わらないようにしていた。だから、たぶん、こんな感じ？」

と参加者たちに背を向ける。

玲子「孤独な感じですね。（新浜と三雲、七瀬に）さあどうですか？」

三雲、米村の側に立つ。

三雲「西野家です。花ハス農家を営んでいます。この家の親子は、犯人からハス田を守ろうとして撃たれました」

玲子「どんな印象を持たれましたか？」

三雲「印象？」

玲子「たとえばお父さんは、どんな方だったと思いますか」

三雲「ああ、はい。とても理知的で、現代的な経営感覚を持つていたと思います。花ハスの栽培も彼のアイディアだった。だから……こんな感じ？」

と腕を組み監督するように参加者の面々を見る。

玲子「わかりました。では次……」

新浜、楠木のほぼ隣の位置に立つ。

玲子「そこは……？」

新浜「犯人が凶器を隠していた小屋です。火炎瓶もここで作られました」

玲子、衣装の入っていた荷物から猟銃と包丁に模した小道具、鞆を取り出す。

玲子「では、これを小屋に置きます。猟銃、出刃包丁、そして火炎瓶の入った鞆です」

新浜、小道具を受け取る。

七瀬が戸惑うように立ちすくんでいる。

玲子「七瀬さん、どうでしょう？」

七瀬「えっと、すみません、思いつかないです」

玲子「いいですよ。それでは、犯人の役をお願いできますか？」

七瀬「犯人ですか？ あ、でも、ちょっとそれは……難しいというか」

玲子「少し動いてもらうだけですから」

七瀬「いや、あの、それは……ごめんなさい。怖い、です」

玲子「怖い？」

七瀬「あの、はい、犯人だけはすみません」

玲子「……わかりました。そうしたら、楠木さん、七瀬さんと代わってください。（七瀬に）犯人の家、

お願いできますか？」

七瀬「はい、それなら」

玲子「楠木さん、とりあえず今だけ犯人の役を」

楠木「はい」

七瀬、楠木の側に行く。

玲子「さあ、村が完成しました。まず事件について簡単にさらいをしましょう」

玲子、ゆつくりと歩き始める。

玲子「三十五年前。一九八〇年、七月六日。午後九時のことです。夏の、晴れた夜を想像してください」

玲子、照明を消す。

玲子「村の北西に、打ち捨てられた小屋があります。その小屋に、一人の青年が身を潜めていました。桐原仁志。岡山市の農協から出向していた、営農指導員です」

玲子、楠木にヘッドライトと鬼の面、作業着を渡す。

玲子「彼は農協の作業着を身に付け鬼の面をかぶり、ヘッドライトをつけると、小屋を出ました。手には猟銃を携え、火炎瓶を詰めた鞆を肩にかけています」

楠木、玲子の言葉を聞きながら面とヘッドライトをつけ、包丁をベルトに挟む。

手に猟銃を持ち、鞆を肩にかける。

玲子「（新浜に）桐原仁志はまずどこへ向かいましたか？」

新浜「小屋を出て……公民館に向かいました」

玲子「楠木さん、移動してください」

楠木、ゆつくりと移動を始める。

楠木、矢神の前で止まる。

玲子「桐原は道なりに進み、公民館に着きました。（矢神に）公民館には誰がいますか？」

矢神「村おこし協議会のメンバーです！ 西野英太郎さん、蜂谷孝一さん、蜂屋祐介さん、遠野修ぞ……」

玲子「（遮る）全部で十人の方が会議に参加してました」

矢神「『明日あいよいよ、花ハス祭りじゃ』『さううじやな』『』」

玲子「公民館に桐原が到着したのは午後九時一〇分。桐原は何をしましたか？」

矢神「窓を壊しました！ そして火炎瓶を投げこんだ！」

矢神の言葉に合わせて、楠木がその通りに動く。

矢神「火が燃えて、人が逃げ出します。桐原は、出てきた人を撃った」

玲子「公民館では二人の方が撃たれました。蜂屋孝一さん、弟の祐介さん。二人とも即死です。桐原はそれからどうしたでしょう？」

矢神「南の、湯田家に向かいます」

楠木、後藤の前に行く。

玲子「（後藤に）湯田家には誰がいましたか？」

後藤「湯田春平さん、奥さんの伊代さん。それから、診療所のお医者さんが来ていました。というのも、この晩、伊代さんが赤ちゃんを産んだからです」

玲子「赤ちゃんを含めて四人が、このお屋敷にいました。午後九時二十分、桐原が押し入ります。何がありましたか？」

後藤「春平さんと、お医者さんを撃ちました」

楠木、猟銃を撃つ真似をする。

玲子「二人とも即死です。伊代さんは赤ちゃんを押し入れに隠れ、難を逃れました」

後藤 自分の手を見る。

玲子「湯田家を後にした桐原は、どうしたのでしょうか？」
向井「ハス田に向かいました」

楠木、向井のいる場所に向かう。

玲子「桐原が闇の中を駆け抜けます。この時点で村中に公民館襲撃のことが知れ渡り、警察への通報が行われましたね」

楠木、向井の前で止まる。

玲子「桐原がハス田に着きました。ここでは何が起ったでしょうか」

向井「（ノートを見て）まず桐原はハス田に向かって次々と火炎瓶を投げつけました」

三雲「そして西野親子を撃った。二人は桐原を止めようとしたんです」

玲子「西野英太郎さんは頭を、息子の達郎さんは胸を撃たれました。二人とも即死です」

楠木、猟銃を撃つ真似をする。

玲子「桐原は次の場所へ移動します。どこへ向かいましたか？」

米村「馬場診療所、です」

楠木、移動を始める。

向井のいる場所から馬場診療所役の米村まで、部屋を横切らなければならない。
その様子を見守る人々。

米村「（楠木が着くと）桐原は診療所の戸口を破り、中へ入りました」

玲子「そこで何をしましたか？」

米村「わかりません。診療所に入った理由、目的。桐原はなぜか黙秘を貫いた」

玲子「馬場診療所を後にした桐原は、自宅に戻りました」

参加者の視線が七瀬に集まる。

ゆつくりと移動する楠木。

七瀬、怯えた様子。

楠木が七瀬の前で止まる。

玲子「午後九時四十分。ハス田を燃やす炎が夜空を赤く照らしています。（七瀬に）何が起こりましたか？」

七瀬「少女が襲われました」

玲子「湯田麻子さん。殺された春平さんの妹です。桐原は包丁で腕に切り付けました」

楠木、切り付ける真似をする。

七瀬、極度の緊張状態にあるのか、目をつむり耐えている様子。

玲子「そこへ警察が駆けつけ、麻子さんを保護。桐原は逮捕されました」

玲子、灯りをつける。

緊張が解けたように息をつく参加者たち。

玲子「(楠木に)楠木さん、どうもありがとう。(みんなに)元に戻ってください」

楠木、面を外し作業着を脱ぐ。

玲子「わずか四十分の間に、桐原仁志は六人の命を奪い、一人に怪我を負わせました。これが大摘村事件、あるいは大摘地区七人殺傷事件の概要です。桐原は逮捕後、罪を認め、一審で死刑判決を受けました。弁護団は控訴を提案しましたが、桐原はこれ

を拒否。事件から三年後の冬、死刑が執行されています。おさらいで感じたこと、印象に残った出来事、疑問。何でもいいので聞かせてもらえますか？」

お互い探り合うような沈黙が一瞬ある。

玲子「(楠木に)どうでした、犯人をやってみて？」

楠木「はい、ええ、そうですね、結構きつかったです」

玲子「きつい」

楠木「精神的に。まともだったらできないなって思いました」

玲子「そうですか。三雲さん、どうでしょう？」

三雲「常軌を逸してますね」

玲子「(七瀬に)どうです？ 何か感じたことがあれば」

七瀬「あ、はい。ええっと、でも犯人はまとも……正常だったんですよね？ つまり、死刑になったということは、その、病気とかではなかった」

楠木「確かノイローゼだったはずですよ。診療所のお医者さんが農協に診断書を提出しています」

矢神「違うでしょ、神経性胃腸炎ですよ」

七瀬「いや、あの、自分が言いたいことはつまり……」

玲子「犯行の際、責任能力はあった。そう判断されています」

七瀬 「そこが逆に怖いんです。まだその、狂っていたというのなら理解できるのですが」

後藤 「人間ではないんですよ。殺された人たちはみんな、何にも悪いことをしていない。次の日には、村おこしのイベントが予定されていたんですよね。きつと、楽しみにしていたと思うんです。そんな時にこんな酷いこと」

楠木 「桐原は殺傷事件に至るまでに、いくつか問題を起こしてましたね」

三雲 「少女へのストーカー、村人への暴力行為」

矢神 「村おこしの資金、勝手に使っちゃうし」

三雲 「桐原という男はなんですか、極めて自己中心的な人物なんじゃないかな」

楠木 「自分の欲望を満たすことばかり考えてますよね」

後藤 「悪人というか、生まれつきの犯罪者なんだと思います」

米村 「まあしかし、それを理解するためのワークショツプですから」

玲子 「そうですね。ではロールプレイに入りましょう。(矢神に紙を渡し)これを……」

向井 「(手を挙げる)あの、ちよつといいですか？」

玲子 「どうぞ」

向井 「実はその、言いたいことがあって」

玲子 「ああ、ええ、なんででしょう？」

向井 「あの、桐原は犯人ではない、と思うんです」

沈黙。

楠木 「……え、え？ それはどういう意味ですか？」

向井 「そのままでの意味です。犯人は他にいる」

矢神 「村の人はみんな、桐原が銃を乱射する姿を見てるわけで」

向井 「鬼の面をかぶってました。顔は見えていません」

後藤 「桐原は、自分がやったと供述しています」

向井 「警察に告白を強要されたとか」

楠木 「それはちよつと、飛躍じゃないですか」

向井、ノートを見る。

向井 「桐原仁志は裁判で言ってます。殺すのは誰でも

よかった。死刑になつてもいいから村人を皆殺しにするつもりだった。でも被害者を選んでません

か？」

楠木 「選ぶ？」

向井 「さっきの再現見ても思ったんですけど、不自然じゃありませんか、道順。公民館から湯田家に

行って、ハス田、診療所。効率的ではないです

ね」

『
眠^{ねむ}
る
羊^{ひつじ}
』

『眠る羊』

【登場人物】

比良坂 智志（ひらさか・さとし）……衆議院議員。与党国防部会・部会長代理。

比良坂 小春（ひらさか・こはる）……智志の妻。

比良坂 宗介（ひらさか・そうすけ）……防衛省装備施設本部調達企画課・課長補佐。智志の兄。

比良坂 衝太（ひらさか・しょうた）……防衛省海上幕僚監部監理部広報室・一尉。智志の弟。

比良坂 礼子（ひらさか・れいこ）……NPO法人「平和を実行する会」所属。智志の妹。

比良坂 トキエ（ひらさか・ときえ）……比良坂智志後援会「智奨会」会長。智志の母。

国枝 昭子（くにえだ・あきこ）……智志の政策担当秘書。秘書団筆頭。

伊藤 勲夫（いとう・いさお）……智志の公設第一秘書。

長屋 知裕（ながや・ともひろ）……智志の公設第二秘書。

常盤 美咲（ときわ・みさき）……智志の父・比良坂清志郎の最後の愛人。flatのオーナー。

【時】

二〇二五年、冬。

【場所】

東京・早稲田。

常盤美咲の経営するギャラリー・flatの作業室。

二〇一五年、冬のある日。

早稲田の閑とした住宅地に佇むギャラリー、**hat**の作業室。

机と幾つかの椅子。

机には、金や銀の色彩が散りばめられた煌びやかな絵。

画面の中央に、破いたような傷がある。

絵の側に修復するための道具。

その絵を見つめる比良坂小春。

少し離れたところに立つ比良坂智志。

智志の手には包帯が巻かれている。

智志、包帯が解けかかっていることに気づく。

不器用な手つきで直そうとする智志。

なかなか上手く直せない。いらだち、咳払いを繰り返す。

小春、絵から離れ、智志の手をとり包帯を巻き直す。

常盤美咲がくる。

美咲「おっと」

小春「ごめんなさい、美咲さん。勝手に入っちゃって」

美咲「ああ、かまいませんよ、ご自由に」

小春「あの……えっと、（絵を指して）それ」

美咲「修復してって、（智志を見て）智志さんのお母様

が」

小春「直せるんですか」

美咲「これくらいなら多分。昔は描いてたんで」

と美咲、椅子に腰掛け、絵を直す準備を始める。

小春、智志に話すよう促す。

智志、咳払いをして話そうとする。

と、外から声が聞こえる。

声

「……は、知らない。（大勢の声が繰り返す「知らない」）……地域の安全を守れ（繰り返す声「守れ」）……迷惑施設の建設、反対（繰り返す声「反対」）……」

声、遠ざかっていく。

小春「……ここ来た時から気になってたんですけど、あれは？」

美咲「デモ」

小春「デモ？」

美咲「施設がね、できるんです。精神障害持った人の。

ここ出てちよつと行った先に」

小春「それでデモを？」

美咲「説明会で納得したはずなんですけど、急に怖くな

つたみたい。町内会総動員で、ああして練り歩いてるんです」

と智志、咳払いをする。

小春「(喋りださない智志を見かねて) 智志さんから、

お願いがあるんです」

美咲「ああ、はい。なんででしょう?」

小春「(智志に) 自分で頼むって言ったでしょ」

美咲「秘書の方からでもかまいませんよ、わたし」

小春「ごめんなさい、政治家なのに喋るの苦手で。(智志に) ほら」

智志「……頼みがある」

美咲「なんででしょう」

智志「この部屋を貸せ」

小春「(智志を小突く)」

智志「この部屋を貸して欲しい。一時間か、二時間」

美咲「?」

智志「あなたの家に大勢で押しかけて、寝泊りまでさせてもらっているのに、その……」

小春「(智志の耳元に) すみません」

智志「すまないが」

美咲「家も、このギャラリーも、智志さんのお父様に建てていただきました。どうぞ」

智志「それから(と苛立たしげに咳払い)」

小春「頑張つて」

智志「今からここで、話し合いをする。それに、参加しろ」

小春「してください」

美咲「いいけど、何の話し合い?」

小春「昨日、ほら」

美咲「ああ……智志さんの証人喚問?」

小春「その練習、というかりハーサルを」

美咲「リハーサル?」

小春「テレビで中継されるので」

美咲「いいんですか、私がいて?」

小春「美咲さん、秘書だったんですよ、この人(智志)のお父様の」

美咲「ええ」

小春「どんなスキヤンダルも美咲さんが上手く納めた。秘書の方みんな言ってます」

美咲「ああ、うん、土下座職人」

小春「危機管理のプロだから、絶対に参加して欲しいつて。(智志に) ね?」

智志「(咳払い)」

美咲「……わかりました。役に立つかはわからないけど……」

智志「(小春に) 長屋に言ってみんな呼べ。すぐ来いっど……」

て」

小春「お礼を言つて」

智志「(美咲に向かい)……感謝する」

小春「(美咲に) 本当にありがとうございます」

智志「小春」

智志、早く行けと言うように手を振る。

美咲「それじゃ、これ(絵と修復の道具) 片付けとく

ね」

小春「すみません」

小春、美咲に会釈すると出て行く。

美咲、傷の度合いを見るために絵を天井にかざす。

美咲「どうしたんですか、(この絵の) 傷」

智志「(手の傷のことと勘違いして) 石が当たった」

美咲「石？」

智志「議事堂に向かう途中、投げられて」

美咲「(智志を見る)」

智志「防ごうとして手をかざしたら……」

美咲「知ってます、ニュースでやってた。(絵を示す)

こっちの傷」

智志「ああ。一と月前、父さんの葬儀の日」

美咲「誰がやったの？」

智志「知らん。嫌がらせだろ」

美咲「この絵、お経が書いてあるでしょ。比良坂家の繁栄と安泰の祈りをこめた。一生懸命描いたのに

ね、清志郎くん……」

智志「その呼び方、やめろ」

美咲「はい？」

智志「父の名前」

美咲「清志郎くん？」

智志「だから……」

美咲「お母様の前では気をつけてます」

智志「比良坂清志郎は防衛大臣の経験者で、あんたよりずっと年上だった。それなりの敬意を……」

美咲「そう呼べって言われたの、清志郎くん」

智志、美咲に詰め寄る。

智志「あんたには感謝してる。迷惑をかけて申し訳な

いとも思ってる。でも、しかし、母さんや兄貴が

許しても、俺はあんたを認めない」

美咲、智志の目を見つめる。やがて……。

美咲「怖いのか？」

智志「？」

美咲「そうなんだ？」

智志「俺が何を怖がるって……」

美咲「（遮る）お父様が最期に何て言ったのか。あなたのこと」

智志と美咲、見つめあう。

長屋知裕がくる。

長屋「美咲さん、今、小春奥さんから聞きました。本当

にありがとうございます、助かります」

美咲「ああ、長屋さん。役に立てればいいんだけど」

長屋「百人力です。椅子とかお借りしても？」

美咲「どうぞ」

長屋「（智志に）とりあえず、智志の席、決めちゃうか？」

と長屋、椅子を上座に置く。

長屋「（智志に）ここに」

智志「椅子に掛けて」国枝と伊藤は？」

長屋「伊藤さんはもうすぐ着くって連絡が。国枝さんは頼村先生の電話に出てる」

智志「頼村？　なんで？」

長屋「なんだろうな。えらい真剣な顔してた。（美咲に）

これくらいの机ありますか？　台とかでもいいんですが」

美咲「ああ、はい。ちょっと待って」

国枝昭子がくる。

長屋「国枝さん、許可が出ました。この部屋、使つていいそうです。それから美咲さんも同席してくれる」

国枝「（美咲に）本当に助かります。（長屋に）トキエ

奥さんは……」

長屋「小春さんと、部屋で支度を」

智志「頼村、なんだって？」

国枝「事務的なことです。先生はお気になさらず。（長屋に）伊藤さんにこのことは？」

長屋「連絡済みです」

国枝「奥さんのところに行つてます。伊藤さんが着いたら顔を出すよう伝えてください」

智志「おい、なんだ。どうした？」

国枝「（長屋に）先生を頼みます」

国枝、足早に出て行く。

美咲、小卓を置く。

美咲 「これ、どうでしょう？」
長屋 「智志？」

智志、机の縁に手を置き、使い勝手を確かめる。

智志 「いいだろう」

長屋 「わかった。(美咲に) 椅子が足りない。もう少しありますか？」

美咲 「展示室の使います？」

長屋 「すみません」

宗介がくる。

宗介 「美咲さん、色々頼って申し訳ない。比良坂家を代表してお礼を申し上げます」

美咲 「いいんです、宗介さん。お父様への恩返しですから」

宗介 「そうですね。(仕切る) あ、その絵とか色々、仕舞ってください。長屋さん、椅子が足りないな。用意して。それからここは少し冷える。僕の寝室から膝掛け持ってきてください。トランクの一番上にあります」

と宗介、鷹揚に智志の椅子に座る。

宗介 「この椅子、少し硬い。美咲さん、クッションを。低反発のやつ」

美咲 「ごめんなさい、低反発の、ないんです」
宗介 「(素で驚く) え、ないの？ なんで？」

と、智志が宗介の前に立つ。

智志 「そこは俺の席だ。長屋、兄貴に椅子」

宗介 「ここは上座でしょう？」

長屋 「証人席に見立ててますので」

比良坂衝太と伊藤勲夫がきて、戸口で智志たちのやりとりを見る。

宗介 「それじゃ僕はどこに座るの？」

長屋 「今、ご用意します」

宗介 「ということは、始まるまでは僕はここでもいいのかな？」

智志 「そこは俺の席だ」

宗介 「僕は比良坂家の長男だよ。いや別に、こだわっているわけでない。でもね、大切な家族会議の時、家の長は上座に着く。それが父の頃からの……」

智志「父さんの跡は俺が継いだ」

宗介「智志、それは違う。君が継いだのは政治家の座だ。地盤、看板、鞆の三つ。でも、一家の頭領は僕が継いだ」

智志「小役人が頭領？ オペラ狂いのぼんくらが？」

宗介「防衛省の課長補佐は小役人ではない。オペラも馬鹿にするな」

智志「どけ」

宗介「やだ」

衝太「宗助兄さん、そこは舞台だよ」

智志、宗助、長屋、美咲の四人、衝太を見る。

衝太「これから行 URI ハーサルは、智志兄さんが主役の芝居。宗助兄さんは観客だ」

といって衝太、椅子を並べる。

衝太「オペラではなんて言うんだっけ、一番いい席」

宗介「一番いい席？」

衝太「ロイヤルシート？ スペシャルシート？ この椅子は、今日これから始まる舞台の一番いい席。ロイヤルでスイートでゴージャスなやつ。ここに座するのに最もふさわしいのは……」

宗介「僕ではない。ただ、比良坂家の頭領という立場は、その席に確かに見合う」

宗介、衝太の用意した椅子に座る。
すかさず自分の椅子に座る智志。

長屋「（衝太に）衝太さん、助かりました。さすが自衛隊広報室」

宗介「（長屋に）クッションとひざ掛けを」

長屋「今、取ってきます」

智志「お前は兄貴の使用人じゃない」

長屋「椅子のついでに。美咲さん、いいですか？」

美咲「はい」

美咲と長屋出て行く。

絵はまだ片付けられていない。

伊藤、智志に声を掛ける。

伊藤「先生、今よろしいですか？」

智志「遅いよ、伊藤」

伊藤「紙の束を差し出す」こちらが、証人喚問の想定問答集です」

智志「（受け取り）結構あるな」

伊藤「マスコミで報じられた疑惑を、できる限り拾い

ました。細かい表現や事実関係はリハーサルで修正します。叩き台だと思ってください」

智志「徹夜か」

伊藤「仕事ですから」

智志「だったらもつと早く持つて来い」

小春が来る。

小春「伊藤さん、国枝さんが呼んでいます。家の方へ」

伊藤「はい？」

小春「野党の頼村先生から電話があつて。その件でお客様と三人で相談したいそうです」

伊藤「頼村先生が？ なぜ？」

智志「小春（何があつた）？」

小春「なんだか秘密の話みたい」

伊藤「（智志に）ちよつと行つて来ます」

宗介「あ、伊藤さん。（想定問答集を指して）僕の方は？」

伊藤「宗助さんの？」

宗介「僕や衝太についての疑惑も、質問にはあがるんでしょ？」

伊藤「可能性は極めて大きいと思います」

宗介「だったら」

智志「（想定問答集に目を通しながら）用意不要」

宗介「どうして？ なんでそう思うの？」

伊藤「質問者用のものを用意しております。始まるまで、こちらを」

宗介「そうではなくて、僕の分が欲しいんです」

衝太「コピーとかできないの？」

伊藤「想定問答集は、外部に漏らすけにはいきません。最低限の数を用意すべきだと国枝さんが……」

宗介「僕の分も含めて最低限になると思うけど」

と智志が想定問答集のページを一枚破り、床に放る。

さらに一枚、もう一枚。

智志「（想定問答集に目を通しながら）宗助兄さんに関係する部分だ。読め」

宗介「伊藤さん、拾つて」

智志「拾うな」

宗介「携帯除菌スプレーを出し）拾ったら、これでシユッシュしてください」

衝太「（とりなす）俺、拾つちやおうかなあ」

小春「あの、じゃ、わたしが」

と智志が立ち、ページを拾つて宗介に差し出す。宗介、スプレーを吹きかけて受け取ろうとする。智志、手を引つ込める。

取ろうとする宗介、取らせない智志。
二人、ムキになつて取り合う。

衝太「ちよちよ、二人とも大人、大人」

止めようとする衝太。

もみ合いになる三人、手を出せない小春と伊藤。

長屋、椅子と宗助のひざ掛け、クッションを持つてくる。

長屋「お待たせしました、つて何？ 伊藤さん、あんな止めなきゃ！」

長屋と伊藤、それぞれ智志と宗介を引き離そうとする。

五人、くんずほぐれずもみ合っている。
比良坂トキエが国枝を従えてくる。

トキエ「（もみ合いを見て）何やってんの！」

すかさず離れる五人。

トキエ「宗介、智志、衝太、並びなさい！」

宗介、智志、衝太、並ぶ。

トキエ「比良坂家が滅びるかもしれないという大事な時に、喧嘩して、どうするの？」

宗介「想定問答集を受け取ろうとしただけです」

智志「渡そうとしたら手が滑りました」

宗介「いえ、悪意をもつて渡すまいと」

トキエ「言い訳しない！ 智志、お父さんはいつもなんて言ってた？」

智志「……」

トキエ「智志さん」

智志「家族一丸となり、国防に魂を捧げ、国家と国民を守れ」

トキエ「秘書の方たちや小春さんは、こんなにも一生懸命、証人喚問のリハーサルの準備をしてくれているのに。肝心のあなたたちが団結しないでどうするの」

宗介「和を乱すのはいつも智志です」

智志「空回りする兄貴が悪い」

トキエ「私たちが今、どんな状況に置かれているか、わかってる？」

宗介「わかるの定義を教えてください」

衝太「慌てて割り込み、宗介を指す」企業との汚職、（智志を指し）政治資金規正法違反、（自分を指し）

政府への反逆。以上の内容について智志兄さんの証人喚問が決定。比良坂家始まって以来の大ピンチです」

智志「俺は無実だ。誰かがはめた」

宗介「僕もそうです」

トキエ「世間は、国民の皆さんはそう思っていない。檢察は比良坂家を潰そうとしています。潰されて当然な家だと、マスコミを使つて国民の世論をあおっています」

智志「比良坂家は潔白です。世論は関係ない」

トキエ「世論がすべてなの。証人喚問で国民の皆さんの理解を得る。それができなければ比良坂家は終わりです」

黙り込む宗介と智志。

美咲がくる。

美咲「あの……お取り込み中ごめんなさい。お客様が来てます」

長屋「客？」

美咲「比良坂家の皆さんに」

全員「？」

美咲「あの……礼子さん、です」

宗助・智志・衝太「礼子？」

礼子がくる。

礼子「……やつ」

驚いたように礼子を見る比良坂家の人々。
礼子、トキエの側へ。

トキエ「……礼子？」

礼子「お母さん。ごめんね、ずっと帰んなくて」

トキエ「首を横に振る」

礼子「五年ぶり？ 六年？」

トキエ「七年」

礼子「目の家、火をつけられたって？ 怖かったでしょ。ホテルも追い出された？」

宗介「れ、れ、れ」

礼子「礼子です」

宗介「よくまあ、のこのこと。父さんの葬儀にもこなかったのに」

礼子「私に父はおりません」

宗介「どうやってここを」

礼子「行きそうな場所全部調べた。ここだけは絶対ないと思つてた」

トキエ「私が頼んだの。一番意外でしょ。もう三日、

お世話になってる」

智志「何しに来た？」

礼子「お母さんを助けに」

智志「母さんには俺たちがいる。出てけ」

礼子「（真似する）『渡そうとしたら手が滑った』『悪意をもつて渡すまいと』」

智志「？」

礼子「全部聞いてたから。アホ兄弟に任せてたら、お母さん死んじゃう」

智志「長屋、ビニル袋持つて来い。こいつ（礼子）の鼻と口をふさげ」

礼子「タカ派が売りの政治家は、自分じゃ何もできないんだよね」

智志「国枝、伊藤、息を止めろ」

国枝「息は止めません。ただ、ちょっと今はまずいかな……」

伊藤「お嬢様、申し訳ないが、今日はお引取りを」

礼子「どうして？ 証人喚問のリハーサルするから？」

国枝「それも聞いてた？」

礼子「いいよ、やって。口挟まないから」

智志「ここであらバれない。殺せ」

礼子「私から二日以上連絡がない場合、警察に通報するよう友達に頼んできた」

衝太「いいよ、いてもらおう」

全員、衝太を見る。

衝太「礼子にはリハーサルに同席してもらおう」

国枝「衝太さん、わかってますか？ 礼子お嬢さんは左翼活動を」

礼子「平和活動」

国枝「平和活動をしています。自衛隊の国防軍化を巡ってお父様と大喧嘩した」

伊藤「その挙句、家を出て行かれました」

国枝「言葉は悪いけど、言うなれば比良坂家の敵です」

宗介「そうだ。こんなのがいたら、リハーサルが滅茶苦茶になる」

伊藤「こればかりは宗介さんが正しい。礼子さんはいない方がいい」

衝太「マスコミや世間は、どうして僕たちを非難するのか。国枝さんたちは考えた？」

国枝・伊藤「？」

衝太「僕たちのことがわからないから。国防省官僚、国防族の議員、自衛官。どんな人物で何をしているのか。わからないから怖い。だから除けようとする」

国枝「それはわかってほしいから」

衝太「わかってもらおうとした？ どこかで無理だつ

「諦めてたんじゃない?」

伊藤「だったとしても、なぜお嬢様を……」

衛太「僕らの常識は世間の非常識。礼子には世間の目で見えぬハルを見てもう」

国枝「礼子さんの目は、世間よりも偏ってます」

衛太「礼子、お前の所属する平和団体……」

礼子「『平和を実行する市民の会』」

衛太「その会の理念は?」

礼子「日々の暮らしの中で、平和を守る方法を考える」

衛太「左翼運動とは違う。生活から離れていない。思想的にも偏っていない。礼子を納得させる答えだつたら、きつと世論も変わる」

国枝「私は反対です」

智志「(遮る) いいじゃないか。いればいい」

国枝「先生?」

智志「(国枝に) やつの椅子を」

国枝「いけません。礼子さんは……」

智志「始めるぞ」

国枝「いいですか、平和を実行する市民の会は……」

智志「俺に二度言わせるな」

国枝「お願いです、聞いてください。礼子さんは……」

智志「こいつ(礼子) 一人をあれであれだ」

小春「礼子さん一人を説得できないで、世論は変えられない?」

智志、絵を掲げる。

智志「この国の平和を守っているのは、俺たち比良坂家。それをわからせてやる」

国枝「(宗介に) 止めてください」

宗介「(衛太に) 礼子は馬鹿で頑固だ。どんな答えでも納得させることはできない」

衛太「でも、宗介兄さんなら簡単でしょ」

宗介「(礼子に) 比良坂家の戦い、目に焼きつけて行くんだな」

国枝「(口パク) 『このドアホ……』」

長屋「(国枝と伊藤に) どうします」

伊藤「(国枝に) どうしましょ?」

国枝「……(礼子に) ここでのことは他言無用。いいですね」

礼子「はい!」

国枝「(長屋に) 椅子、取ってきます。美咲さんに段取りを。(伊藤に) 来て」

と国枝、伊藤を連れて出る。

長屋、美咲を席へ促す。

長屋「(美咲に) こちらへ。比良坂家の皆さんはこちら

にお願いします」

悠然と着席する智志。その側に掛ける小春。

トキエ、宗介、衝太、席に着く。

トキエに寄り添う礼子。

トキエ「(礼子に) 小春さん。智志のお嫁さん」

小春「小春です」

礼子「よろしくお願いします」

長屋が美咲に説明をする。

長屋「これから想定問答集に基づき、質疑応答を行います。智志先生の回答で、気になった言い回しや、

アドバイスがあれば都度、ご指摘ください」

美咲「わかりました」

長屋「宗介さん、衝太さんの疑惑についても触れます。こちらについても何かあれば。(宗介と衝太に)

事実と異なる場合、訂正を」

衝太「了解です」

小春の顔をまじまじと見る礼子。

国枝と、椅子を持った伊藤が来る。

伊藤の顔は強張っている。

国枝、進行役の席に着く。

礼子に椅子を勧め、質問者役の席に着く伊藤。

長屋、守るように智志の側に控える

国枝「お待たせしました。準備はよろしいですか？」

美咲「国枝ちゃん、ごめん、いい？ 弁護士は同席しないの？ ほら、髭の顧問弁護士」

国枝「昨日、クビに」

美咲「クビ？」

長屋「対応がまずくて智志先生と『喧嘩した』という手まね」

国枝「新しい弁護士は手配済みです。リハーサル後、結果を元に打ち合わせを」

伊藤「(額を叩く) すみません、忘れてた」

国枝「なに？」

伊藤「新しい弁護士の先生から連絡が。打ち合わせを早くしたいと。一時間、遅くても二時間後には」

国枝「延ばしてもらって」

伊藤「忙しい方なので」

国枝「では二時間後と返事を。(全員に) 証人喚問のリハーサルを始めます。時間がないので速やかに進むよう、ご協力ください。進行は国枝が務めます。

(智志に) 伊藤が質問を読み上げますので回答を」

智志「(わかってる、と手振り)」

国枝「伊藤さん」

伊藤「(質問者用問答集を読む)『これより会議を開きます。内閣提出、武器輸出に関する特別措置法案を議題と致します』」

礼子「(手を上げる)はい!」

伊藤「比良坂礼子くん」

礼子「これ、証人喚問のリハーサルじゃないの?」

国枝「衆議院の特別委員会が開かれるので」

礼子「ここまで忠実に?」

国枝「リハーサルですから。(伊藤に)続けて」

伊藤「えっと……『本案の審査に関し、智奨会問題および、防衛省問題について、比良坂智志くんより、証言を求めることに致します。全員、ご起立願います』」

全員 立つ。

伊藤「(読む)『それでは比良坂智志くん。宣誓書を朗読してください』」

智志、想定問答集に目を落とす。

智志「(咳払い)『良心にした……(咳払い)した、した(咳払い)』」

小春「頑張つて」

智志「した、したが(咳払い)」

長屋「つて。つて」

智志「したがて」

礼子「ちよちよ。大丈夫、お兄ちゃん?」

長屋「何であれ、従うことは苦手なんです」

小春「プライド高いから」

智志「『良心に従つて』」

小春「言えた」

智志「『真実を述べ、何も隠さず、また何も付け加えないことを誓います』」

伊藤「『全員、ご着席ください』」

全員 座る。

伊藤「(読む)『これより証人に対して証言を求めます。こちらから質問している時は着席のままです。結構です。が、ご発言の際はご起立ください』」

国枝「(全員に)ここまでで何か問題は?」

礼子「ありまくりでしょ」

長屋「(智志に)良心は自分のもんだ。お前は自分に従う。そう思え」

小春「(智志に)大丈夫、できるから」

智志「(顔を手で覆う)」

長屋「本番までに何とかします。続きを」

伊藤「読む」『まず総括的なお尋ねをします。現在、当特別委員会では、武器輸出三原則の見直しという、日本の国防に関して最も重大で重要な審議を行っている最中でございます。このような喚問を行うことは、時間の浪費であるというのが、委員会の正直な気持ちであります』

智志「カチンと来て立つ。」

伊藤「読む」『あなたと、あなたの家族の起こした問題を問うために、こうして時間を割かなければならないことに対し、どのような責任を感じておられますか』

玲子「怒られてんの？ だっさ」

国枝「(智志に)過去の事例を参考にしていきます。実際にありえる。今から慣れてください」

智志「挙手する。」

伊藤「比良坂智志くん」

智志「問答集を読もうとして止める。」

智志「……はじめに言っておく。今回のスキヤンダルについて。俺はやましいことはしていない。兄貴も、衝太も、無実を訴えている。それも信じる。

比良坂家は祖父の代から半世紀にわたり国防に尽くしてきた。私利私欲を滅し、国家と国民を守ってきた。それが誇りだ。今、その誇りが汚されている。汚名をすすぎ、名誉を回復する。そのためなら、泥水もすする」

智志「想定問答集を読み上げる。」

智志「読む」『この度は私と、私の家族が起こした不祥事に関しまして、国民の皆様と防衛省内局、および自衛隊の皆様に対し、お騒がせしたことを、大変申し訳ないと思っております。また、武器輸出三原則という大切な政府見解を継続するか否かという審議を進める上で、わたくしども比良坂家の不祥事問題が大きな障害となっておりますことを、国会議員として痛切に(声が小さくなる)』

礼子「聞こえませんか」

智志「(大きく)『痛切に責任を感じております』。おい、

伊藤」

伊藤「『ご発言の際は挙手をお願い致します』」

智志「(挙手) なんで俺がこいつら(宗介と衝太)の分

も謝るんだ」

伊藤「なんで？」

智志「小春、あれだ、あれ、あれしてあれ！ 三十歳！」

小春「(伊藤に) 兄弟とはいえ、みんな三十歳を過ぎています。別々の人格なんだから、俺が謝るのはおかしい、と」

国枝「泥水するって言ったでしょ」

智志「納得できればな」

美咲「(拳手)」

伊藤「『常盤美咲くん』」

美咲「(立って) 言い分ごもつとも。三人とも大人です。自分の行動の責任は自分で負う。智志さんが二人

の分を謝る必要、本来はありません」

伊藤「しかし」

美咲「しかし、智志さんは国会議員です。一般の人と立場が違う。一つ責任が重いと思ってください。それに、国民の非難は比良坂家全体に向けられています。ここは比良坂家を代表して謝罪すべきです」

宗介「比良坂家の代表は僕だ」

智志「俺がやる」

美咲「(伊藤に) それから、『お騒がせして』は削除しましょう」

伊藤「削除？」

美咲「騒がせたことを謝るんじゃない。疑惑によつて防衛行政への不信感を抱かせた。そのことを国民に謝罪する」

長屋、智志の想定問答集を訂正する。

長屋「(智志に) これで」

智志「(読む) 『まず私と、私の家族が起こした不祥事

に関し、国民の皆様と防衛省内局、及び自衛隊の皆様に対し、謝罪の言葉を述べさせていただきます』」

長屋「(書き足しながら) さらに、こうして、こう」

智志「(読む) 『防衛行政は国民の平和と安全を確保すると共に、国家財政に直結する極めて重大な責務です。国民の皆様と信頼があつてこそ、成し遂げられる』」

長屋「(書きながら) にもかかわらず……」

智志「(読む) 『にも関わらず、疑惑によつて国民の皆様と不信感を抱かせたことは遺憾であり、与党国防部会に名を連ねる議員として、謝罪の言葉が見つかりません。本当に申し訳ございませんでした』」

長屋「一礼」

智志「？」

長屋「頭を下げて」

智志「いやだ」

小春「おへそを見て」

智志 へそを見ようとして頭を下げる。

長屋「(美咲に) どうでしょう?」

美咲「とりあえず(と頷く)」

長屋「(智志に) よし、最後まで行こう、な?」

智志「(続きを読む)『今日、この委員会では比良坂家を巡る疑惑に対しまして、誠実にお答えすること、委員会の審議が円滑に進むよう願うばかりで……』」

美咲が問答集に訂正を加えている。

それを読む智志。

智志「(読む)『委員会の審議が円滑に進み、国民の皆様
の防衛行政に対する信頼を取り戻すべく、全力を
尽くします』」

智志、席に着く。

伊藤「(読む)『それでは、次の尋問に移ります』」

国枝「と、その前に」

国枝、立つ。

国枝「今回の証人喚問で証言を求められるであろう疑惑について整理します。皆さんすでにご存知だとは思いますが、マスコミの報道、ネットでの憶測など情報が混乱している。状況を整理し、認識のすり合わせをさせていただきます」

礼子「口裏合わせなの?」

国枝「すり合わせです。まず智志先生の不正献金疑惑について」

智志「(長屋に手振りで合図)」

長屋「ええ、比良坂智志代議士の政治資金管理団体、智
奨会への……」

美咲「あの、これ智志さんがやらないと意味がないんじゃない?……」

国枝「いやまあそうなんですけど」

智志「長屋、行け」

長屋「政治献金に重大な疑惑が生じました。政治資金規
正法では、政治資金管理団体への企業からの献金
について……」

礼子、国枝に向かって激しく挙手。

国枝「(礼子に) なんですか?」

礼子「意味が全然わかりません」

国枝「あなた政治家の娘でしょ」

礼子「じゃなくて、世間の目。漢字ばっかで聞いてて理解不能」

国枝「時間がないんです」

美咲「礼子さんに賛成。国民に届く言葉を選ぶ。その練習もした方がいいと思う」

礼子「テレビで中継されるでしょ」

国枝「智志先生にはハードルが高すぎます」

トキエ「練習、しましよ」

美咲、国枝、礼子の三人、トキエを見る。

トキエ「清志郎先生はいつも、わかりやすい言葉で国民の皆さんに寄り添おうとしました。私たちも学ぶべきです」

長屋「あの、ではやってみます」

トキエ「あなたではなくて。智志さん」

智志「俺が、なぜ?」

衛太「(智志に) 政治から遠い、一般の人に話すように」

小春「大丈夫(と背中に手を添える)」

智志、全員を見渡し、考えて……。

智志「政治家をやっていくには金がかかる。国会議員

としての給料だけではまかなえない。そこで活動のための金を寄付してもらう。これを献金と呼ぶ」

長屋「その調子」

智志「この寄付が、いくらでもできるとしたら、何が起るのか」

小春「(礼子に) わかります?」

礼子「(智志に) 教えてください」

智志「多く寄付をしたものが、政治家を思い通りに動かせる。政治を金で買えるようになる。金をたくさん持つ者が得をする。そこで、寄付できる金額に上限を設けた。そのルールが政治資金規正法だ」

小春「です」

智志「です。また、このルールでは、企業の寄付は禁止されている。政治家が、企業の利益になるような政治を行うことを防ぐためです」

衛太「いいよ、その調子」

智志「智恵会という会がある、あります。これは俺、

私の仕事を支える……」

長屋「応援する」

智志「応援するための会、です。母のトキエが会長を務め、政治活動の資金管理を……」

『
狼^{おお}
た^か
ち^み
の
午^ご
睡^{すい}
』

『狼たちの午睡』

【登場人物】

仲野玄太（なかの・げんた）……サン・オブ・サンの元・社長。

皆川経一（みながわ・けいいち）……NPO法人『平和を
実行する市民の会』代表。

今宮次郎（いまみや・じろう）……仲野の右腕。光村貿易
経理部勤務。

【時】

二〇一四年十二月。

【場所】

池袋の安宿の一室。

【補足】

■サン・オブ・サン■

架空の企業。十五年前、仲野玄太が皆川経一、今宮次郎とともに立ち上げた。インターネット事業で急成長を遂げた後、不動産、金融と次々と進出。球団と大手マスコミを買収し話題となる。七年前、仲野がアメリカの宇宙航空開発企業・ペンディゴ社買収を画策した際に仲野の指示による粉飾決算が発覚。仲野の逮捕後、SSコミュニケーションズに社名変更。しかしかつての勢いは失われている。

二〇一四年、十二月。

池袋の安ホテルの一室。

簡素を通り越して殺風景。椅子と小卓。

小卓の上には戦車や戦闘機の模型。

戸口を背に男が一人、立っている。

仲野玄太。

シューベルト「野ばら」の鼻歌。戦車や戦闘機を優雅な手つきでもてあそぶ。

戸口に男が来る。今宮次郎。

今宮「失礼します。到着されました」

仲野、戸口に背を向けたまま頷く。

今宮「(戸口の外に)どうぞ」

会釈して男が入ってくる。皆川経一。

今宮「(仲野に)NPO法人『平和を実行する市民の会』

代表の皆川さんです」

皆川「(名刺を取り出し)皆川です。この度は私どもの活動に関心をお持ちいただき、ありがとうございます。当会に財政支援を行っていただけるということで、改めて活動内容について……」

皆川、小卓の上の模型に目を留める。

仲野、皆川のほうを振り返る。

ぎよつとする皆川。

皆川「……仲野さん？」

仲野「(名刺を取り)しばらく会わないうちに偉くなつたな。三年ぶりか？」

皆川、きびすを返し部屋を出ようとする。
立ちふさがる今宮。

今宮「経一」

皆川「今宮さん、どいてください」

今宮「仲野から頼みがある。話だけでも」

皆川「こんなやり方、フェアじゃない」

今宮「こうでもしないと、お前来ないだらろ」

皆川「だからって騙すなんて」

仲野「今宮を責めるな、俺の指示だ」

皆川「帰ります」

仲野「ちよつとだけ、な？ なんつーの、ほら、旧交を暖める？」

皆川「僕に犯罪者の知り合いはいない」

仲野「昨日釈放された」

皆川 「罪は消えない」

仲野 「人を殺したわけじゃない」

皆川 「もつと酷い」

仲野 「ちよつと数字を書き換えた。それだけだ」

皆川 「ちよつと？」

仲野 「三億の赤字を、（今宮に）いくらだっけ？」

今宮 「五十億」

仲野 「五十億の黒字に」

皆川 「この人全然反省してない」

仲野 「反省ならしたよ。刑期を終えた。だからここに

いる」

皆川 「あなたのせいで、僕たちの人生はめちゃくちゃ

に」

仲野 「俺のせい？」

皆川 「そうですよ。僕も今宮さんも、あなたを信じて

た。あなたのために、あなたの夢のために力を尽

くした。それなのにあなたは、結局自分のことだ

け考えていた。これ以上、関わりたくない。失礼

します」

出て行こうとする皆川。

仲野 「俺が怖いのか？ 俺の復讐が怖いのか？」

皆川、動きを止める。

仲野 「自分だけいい子になって、俺を売った。後ろめ
たいんだろ」

皆川 「……」

仲野 「お前が検察にリークしなければ、全部うまくい
つてた。粉飾決算なんてどうでもいいくらいの大
金が転がり込むはずだった。めちゃくちゃになっ
たのは俺と、株主の人生だ。お前が壊した」

今宮 「（たしなめる） 仲野」

仲野 「（皆川に） 恨んじやいないよ」

皆川 「……」

仲野 「過去は変えられない。起こってしまったことを
悔やんでも意味はない。そうだろう？ 俺は『今』
のこしか見ていない。復讐は時間の無駄だ」

皆川 「……守銭奴」

仲野 「……」

皆川 「金の亡者、死の商人、エゴイスト」

今宮 「もうよせ」

皆川 「僕は、良心に恥じることは何もしていない。（仲
野に） あなたは悪人です。金の亡者だ。僕や今宮
さんを散々利用して、自分が儲けることだけ考え
て。それだけじゃない。あなたは戦争ビジネスに
手を出した。武器商人になろうとした。その暴走

を僕は止めた。そのためのリークだ。僕は正義を行っただけです」

仲野 「だったら逃げる必要はない。ここにいろ」
経一 「……」

今宮 「三十分でいい。時間をくれないか」

皆川 「……十分なら」

仲野 「二十分」

皆川 「十五分」

仲野 「十七分……」

今宮 「(遮る) 仲野」

仲野 「十五分」

皆川 「話、聞いたら、すぐに帰ります。用件だけ。単

刀直入に」

仲野 「わかった。比良坂礼子を紹介しろ」

皆川 「はい？」

仲野 「比良坂礼子。お前んとこの、平和がどうとかつ

て会の、会員」

皆川 「それはわかってます。どうして礼子さんのこと

を……」

仲野 「(今宮を指し) 調べさせた。付き合ってたって？」

皆川 「(今宮に) どういうことですか」

仲野 「話してんのは俺だ」

皆川 「人質のつもりですか？」

仲野 「はあ？」

皆川 「礼子さんをだしに、僕に何かさせるとか？」

仲野 「比良坂礼子との仲介役。それ以上の価値、お前にはない」

皆川 「思い出してきた、この嫌な感じ」

仲野 「彼女、お前の信者なんだろ。お前の言うことなら何でも聞く」

皆川 「今宮さん、この人は何にも変わってない。むしろ悪化してる」

仲野 「会わせてくれればそれでいい。お前とはそれ以上関わらない」

皆川 「(今宮に) 全然話聞かないし、平気で人の人生を踏みにじる」

仲野 「おいどつちなんだ、会わせるのか、会わせないのか」

皆川 「会わせるわけじゃないでしょ！」

皆川、仲野に向かう。

皆川 「彼女は地球から争いがなくなことを願っています。心の底から。そのためにできることを日々積み重ねている。ピースイベントの企画、戦争と平和についてのワークショップ。そんな人を、どうしてあなたたみたいなの……」

仲野 「(皆川をじつと見ている)」

上演記録

『獣のための倫理学』

2013年2月19日(火)～3月3日(日)

@LIFT

脚本・演出：柳井祥緒

出演：北川義彦、柳澤有毅、藤原薫（以上、十七戦地）／

植木希実子（Bobjack theater）、小林祐真、真田雅隆、関根信一（劇団フライングステージ）、
永松昌輝、浜野隆之（下井草演劇研究舎）

『眠る羊』

2014年2月19日(水)～3月2日(日)

@LIFT

脚本・演出：柳井祥緒

出演：北川義彦、柳澤有毅、藤原薫（以上、十七戦地）／

植木希実子（Bobjack theater）、鶴沼ユカ（3.14ch）、坂本なぎ、真田雅隆、
澤口渉（ロデオ★座★ヘヴン）、鈴木理保、森尾繁弘

『狼たちの午睡』

SHOTGUN produce 『BULLETS ASSORTED』内短編

@GEKIBA

脚本：柳井祥緒 演出：笹浦暢大（もじゃもじゃ頭/うなぎ計画）

出演：島田雅之（DART'S/ダブルスチール）、鶴町憲、千田剛士（シアターキューブリック）

【リーディング公演】

2014年2月20日(木) 19:30、26日(水) 15:00 『眠る羊』 終演後

@LIFT

脚本・演出：柳井祥緒

出演：島田雅之（DART'S/ダブルスチール）、鶴町憲、千田剛士（シアターキューブリック）

柳井祥緒（やない・さちお）……劇作家／演出家

1979 年 11 月 17 日、東京都出身。B 型。

2001 年、演劇企画ミルク寺を旗揚げ。主宰・作・演出として 2009 年の解散までに全 12 作品を手がける。

現在は、十七戦地の戯曲・演出を担当するほか、外部劇団への脚本提供、演出も多数手がける。

2011 年、十七戦地 #1 公演に書き下ろした戯曲『花と魚』が、

第 17 回劇作家協会新人戯曲賞を受賞。

2015 年、「ウルトラマン X 第 10 話 怪獣は動かない」の脚本を執筆する。

十七戦地（じゅうななせんち）

東京を拠点に活動する劇団。

俳優・北川義彦と劇作家／演出家・柳井祥緒を中心に 2010 年結成。

ファンタジーや SF、歴史や民俗などの題材を扱いつつ、

市井の人々の暮らしや葛藤を表現。

壮大なイメージを喚起させる情景を描き、現実と地続きの幻を立ち上げる。

最近では、スピーディーな対話で事件の真相を暴いていく

「論争劇」と呼ばれる作風を得意とする。

柳井祥緒 戯曲集 2
2015 年 11 月 11 日発行

著者 柳井祥緒

発行 十七戦地

050-3716-1717
inquiry@17cm.info
<http://17cm.info/>

乱丁・落丁本はご面倒ですが上記までご連絡ください。
お取り替えいたします。

©Sachio Yanai ©17cm Printed in JAPAN